

受験番号

(一) 次の文章はバイオリニストでもあり作曲家でもある葉加瀬太郎氏はかせたろうが書いたものです。これを読んで後の問いに答えなさい。(本文には、省いた所があります。)

答えは、解答用紙に書きなさい。また、字数制限のあるものは句読点・記号もふくみます。

この国では、ポピュラー音楽をやっているミュージシャンのことを、「アーティスト」と呼ぶ。「芸術家」という立派な日本語があるにもかかわらず、それを使うことはめったにない。僕自身ぼくじしん、この本のなかで自分のことを「芸術家」と呼ぶのを無意識のうちに避けてきたようなところがある。

日本では、「アーティスト」と「芸術家」のあいだに、歴然としたニュアンスの違いが横たわっている。「芸術家」という言葉に付随するニュアンスに抵抗ていこうがあるから、僕も「アーティスト」という言葉を選ぶのだと思う。

いったい①ふたつの違いとは何か？

アメリカやヨーロッパには、「アーティスト」——ドイツ語やフランス語で何というのか知らないけど——にかわる言葉はないわけだから、ニュアンスの違いも生じない。ブラームスもベートルズもマイケル・ジャクソンも、「アーティスト」だ。

けれど日本では、ユーミンや小室哲哉こむろてつやや坂本龍一さかもとりゅういちや僕を「芸術家」と呼ぶ人はいない。音楽の世界でそう呼ばれるのは、大昔に死んでしまった人たちか、クラシックをやっている人たちだけ。

そこに、「アーティスト」と「芸術家」と「芸術家」——あるいは「アート」と「芸術」——のaキョウカイセンあきょうかいせんが引かれている。日本人の多くは、「芸術」＝「博物館」といったイメージを抱いているのではないだろうか。博物館に入るような作家や作品、評価の定まった昔のものだけが「芸術」だと思っ込んでいるようなところがある。

現在クラシックをやっている音楽家たちは「博物館入り」しているわけではないけれど、演奏している曲そのものは、「殿堂入り」した古い音楽ばかりだ。いずれにしても、いまの時代と寄り添いながら音楽を作っているこの国のミュージシャンたちは、「芸術家」とは呼ばれない。

欧米おうえいと日本の美術館をくらべると、そのあたりの違いがよくわかる。ニューヨークやパリの美術館へ行くと、ゴッホでもマチスでも手で触れることができる。ところが日本の美術館では、ガラスケースに入れられてしまう。前にはロープまで張ってある。触れるどころか、近づくことすらできない。日本人にとって「芸術」とは、「ガラスの向こう側に鎮座ちんざましましているありがたいもの」なのだ。けれど、モーツアルトだろうがベートーベンだろうがゴッホだろうが、最初から「博物館入り」していたわけじゃない。いまのミュージシャンと同様、それぞれが生きた時代のなかで、自分の作品を追究していただけ。

それが高く評価されて、現在まで生き残ってきた。のちに「芸術」として認められたから、博物館入りしたのではない。彼らかれが作ったものは、最初から「芸術」だった。

「いま生まれている音楽」と「博物館入りした音楽」を日本人が区別して考えてしまうのは、明治時代になってから欧米のクラシック音楽が一気に流れ込んできたからだろう。だから、いまだに②モーツアルトとドビュッシーを「クラシック音楽」というジャンルでいっしょくたに考えている人が多い。

十八世紀の終わりに死んだ人と二十世紀の初めまで生きていた人を同じジャンルでくくるのは、どう考えてもナンセンスだ。同じように扱あつかうならば、ワーグナーとローリング・ストーンズも区別せずに扱わなければいけない。ワーグナーとストーンズがまったく違うものだというなら、モーツアルトとドビュッシーも区別して考えるべきだろう。

ヨーロッパの人たちは、そのところをちゃんと理解していると思う。彼らにとって、すべての音楽は、バッハやヴィヴァルディの時代から何百年もブレメンブレメンと続いてきた音楽史のなかに位置づけられる。だから、モーツアルトもワーグナーも、ストーンズも、みんな「時代のなかで、生きた音楽を作り続けるアーティスト」ということになる。

生きた時代が違えば、アーティストが作る音楽も違ってくるのが当然。だからヨーロッパの人々は、ワーグナーとストーンズを区別

受験番号

すると同じように、モーツァルトとドビュッシーも別のものとして考える。ところが日本では、「いま作られている音楽」以外は、みんな「クラシック」というひとつのジャンルで片づけられてしまう。

博物館入りした「③お芸術」みたいなものだけがありがたく思う傾向がある。たとえばオペラをエンターテインメントとして純粋に楽しんでる人はこの国には少ない。文句もいわずにS席四万五千円(！)のチケットを買うのは、高尚な「芸術」だと思ってるからではないか。そういう「贅沢品」を聴きに行くことが一種のステイタスだと思ってるように思えてならない。

本来オペラというのはそれほど高尚なものというわけじゃない。僕は高校生のときイタリアのベローナで初めて『アイダ』を見て、「これがオペラなんだ！」と感じた。座ったのはたった七百円の席で、隣では地元のおじさんがワインを飲んで酔っぱらっていた。そのおじさん、ほとんど居眠りをしていてステージを見ていないんだけど、自分の好きな歌が始まった瞬間にガバツとからだを起こして、「ブラボー！」と叫ぶ。日本でいえば、「北島三郎ショー」をエンジョイしている人たちの感覚と変わらない感じ。

文化の違いといえはそれまでだけど、オペラのコンサートに何万円も払う感覚は、やっぱりおかしい。もちろん、そこに価値を見いだしている人がいるから商売が成り立っている。それはそれでかまわない。けれども、④それだけを「芸術」として考えているかぎり、この国の文化に未来はないような気がする。いま目の前で生まれているものをたいせつにする気持ちがあれば、世界に通用するような「芸術」は生まれないのではないだろうか。

⑤僕は「芸術家」と呼ばれたいわげじゃない。葉加瀬太郎は葉加瀬太郎だから、人からどう定義されようと僕には関係ない。ただ僕の場合、東京「藝術」大学に通っていたことと、バイオリンという一般的にはクラシックで使われる楽器を弾いているために、不本意なイメージを持たれることがある。クライズラーが「クラシックとポピュラーの橋渡しをするバンド」と誤解されていたのと同じように、いまだにどちらかといえば「博物館寄り」のミュージシャンだと勘違いされることが多い。

インタビュウのときに、「葉加瀬さんって、実はイメージと違う人なんですわね」といわれることがしばしばある。向こうは、「難しい顔で理屈っぽく芸術を語る藝大出のバイオリニスト」をイメージして来ているに違いない。

クラシックというと、燕尾服を着て演奏するとか、コンサートで咳をしてはいけないといった、堅苦しいイメージがつきまとう。だから、その世界を経験した人間も堅物だと思われがちだ。ところが実際に僕と会ってみると、お気楽な感じでヘラヘラ笑っているの、「あれ？」と感じるのだと思う。

ときには「難しい顔で理屈っぽく」音楽を語ることだってある。でもそれはクラシックのことを語るときだけじゃない。クラシック音楽をお気楽に語ることもあれば、いま世の中に流れている音楽や自分の作品について、眉間にシワを寄せながら語ることもある。

僕にとってはクラシックもポピュラーも同じ「音楽」でしかない。それに、もともとそういうものなのだ。いま「クラシック」と呼ばれている音楽も、それが作られた時代の人々にとっては「いま」の音楽だった。モーツァルトもベートーベンも、当時はポピュラー音楽だったのだ。

シヨパンにしても、いまでこそ音楽室の壁に肖像画が掲げられる「歴史上の人物」だけけれど、彼が生きていた時代の人々にとっては超人気スターだった。ピアノがうまくルックスも抜群によかったシヨパンは、自分の曲を演奏して世の女性たちを熱狂させていた。いまでいえば、河村隆一くんみたいなものかもしれない。

シヨパンと同様、当時の人気ピアニストだったリストの場合は、いまでいうキャラクター・グッズを作つてまで商売をしていた。チヨコレートのパッケージに自分の顔を入れたり、ステッキに自筆のサインを入れたりして、ファンに売っていた。バンドのロゴをプリントしたTシャツをライブ会場で売ると、なんの変わりもないでしょう？(中略)

僕が作曲家の裏話をよく知っているのは、藝大で教わったからじゃない。子どものころから、それぞれの「作品」だけじゃなく、作曲家の生きかたにも興味があった。だから作曲家の伝記を読んだりしながら、自分で調べたりするのに夢中だった。(中略)

作曲家の人生を知れば、作品の聴きかたも違ってくるし、理解が深まる。ところが学校の授業では、そういうことを教えてくれない。音楽史で扱うのは、表面的な事実だけ。「バロックがどうした」とか「ロマン派がこうした」ということだけ教えられても、興味は持

受験番号

てないに決まっている。

それで「さあ、みんなで聴きましょう」とベートーベンの『田園』を聴かされても、眠くなるだけ。音楽の授業で覚えていることといえば、せいぜい、教科書に載ってる作曲家の写真を見て、「なんで、みんなこんな妙な髪型なんだ？」と不思議に思ったことくらい。僕自身、授業だけでクラシックの世界に触れていたら、セツタイに嫌いになっていったと思っっている。

どんな音楽も人間が作ったものだから、まずはそれを作ったのがどんな人だったのかを教え、いま作られている音楽になぞらえて説明したりする。「ベートーベンは、昔の人たちにとってはいまのロックみたいなものだったんだよ」といえば、少しは話を聞く気にもなるんじゃないだろうか。

⑥もうひとつ、クラシックへの理解を妨げているのは、音楽史だけを単独で教えていることだと思う。音楽は、独自に歴史を積み重ねてきたわけではない。当然、同じ時代の絵画や建築に大きな影響を受けながら変化してきた。何よりも、政治や経済を含めた世界全体のなかで音楽を位置づけないと、音楽の歴史を勉強する意味がない。

社会背景が変われば、⑦音楽家の生きかたも変わってくる。モーツアルトの時代までは、宮廷に雇われるのが音楽家の生きる道だった。封建時代だったから、オーディエンスは市民ではなく王様だ。

ところがモーツアルトは、王様のためだけに曲を書くことにも足りなくなっって街に飛び出した。彼は音楽性だけでなく、音楽を市民に解放することによって、行動の面でも歴史的な存在dイギを示した。

そういう流れは、ヨーロッパ社会そのものの歴史とも一致する。フランス革命が起きたのは、モーツアルトが死ぬ二年前のこと。彼が宮廷を捨てたのと時を同じくして、封建体制を打倒する動きが始まった。

そして世の中はナポレオンの時代となり、音楽の世界ではベートーベンが登場する。彼も、市民のなかで音楽を作り続けた人間だ。こうやって見れば、音楽家が世界史の流れと無縁ではいられないことが、よくわかるはずだ。(葉加瀬太郎『顔-Faces-』)

注 1 高尚…上品で立派なこと。 2 オーディエンス…観客。

問一 ― 線 a～d のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ― 線①「ふたつの違い」とありますが、筆者が考える日本での「アーティスト」と「芸術家」の違いについて、次のように説明しました。空らんに入る、最もふさわしいことばを、本文より指定された字数でぬき出して答えなさい。

日本では「アーティスト」は（ア 十～十五字）人たちで、「芸術家」は音楽の世界において博物館に入っているような（イ 十字）人たちや（ウ 十一字）人たちを指すと思われる。

問三 ― 線②「モーツアルトとドビュッシー」とありますが、十八世紀の終わりに亡くなったモーツアルトと二十世紀の初めまで生きていたドビュッシーを、日本とヨーロッパの人はそれぞれどうとらえていると筆者は述べていますか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 日本人はモーツアルトのことを「博物館入りした音楽」を作曲した「芸術家」、ドビュッシーのことを「いま生まれている音楽」を作曲した「アーティスト」ととらえている。一方でヨーロッパの人たちは二人のことを、生きた時代が違うだけの同じ「アーティスト」ととらえ、二人が作った音楽を、その時代と寄り添いながら作られたものだとまとめる。

イ 日本人は二人のことを、クラシック音楽を作曲した同じ「芸術家」ととらえ、二人が作った音楽を、作られた時代ごとに音楽史に位置づけながら分別する。一方でヨーロッパの人たちはモーツアルトのことを「博物館入りした音楽」を作曲した「芸術家」、ドビュッシーのことを「いま生まれている音楽」を作曲した「アーティスト」ととらえている。

ウ 日本人は二人のことを、「いま生まれている音楽」以外を作った同じ「芸術家」ととらえ、二人が作った音楽を「博物館入りした音楽」とすると同一視する。一方でヨーロッパの人たちは二人のことを、その当時生きた音楽を作っていた同じ「アーティスト」ととらえ、二人が作った音楽を作られた時代の違いによって異なるものだと区別して考える。

エ 日本人は二人のことを、明治時代になってから流れ込んできた音楽を作曲した同じ「芸術家」ととらえ、二人が作った音楽をいっしょくたにして他のジャンルと切りはなして考える。一方でヨーロッパの人たちは二人のことを、いまでも通用する音楽を作っている同じ「アーティスト」ととらえ、二人が作った音楽をストーンズと同じポピュラー音楽に分類する。

問四 ― 線③「お芸術」について、次の問いにそれぞれ答えなさい。

1 あえて「お」をつけているこの表現には、筆者のどのような気持ちがこめられていますか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 博物館に入るような立派な作品を作りあげた芸術家に対して、尊敬する気持ちがこめられている。

イ 作品をガラスケースに入れて触れられないようにする博物館に対して、非難する気持ちがこめられている。

ウ 安価なショーでも純粹に楽しんでいるヨーロッパの人々に対して、尊敬する気持ちがこめられている。

エ 伝統的で立派な音楽だけに価値があると思っている人々に対して、非難する気持ちがこめられている。

2 初めに「お」が付くことばをふくむ慣用句の使い方として、まががっているものを、次から一つ選んで記号で答えなさい。

ア 「お株を奪う」：彼のトランペットの演奏は、プロのトランペッターのお株を奪うほど上手だ。

イ 「お眼鏡に適う」：素晴らしい彼の演奏技術が、指揮者のお眼鏡に適って、楽団のリーダーに選ばれた。

ウ 「お鉢が回る」：いい気になった彼は練習もせず遊んでいたお鉢が回って、本番で失敗してしまった。

エ 「お茶を濁す」：彼は失敗の原因を問いたされ、自分のせいと言えずお茶を濁した返答をした。

問五 ― 線④「それだけを『芸術』として考えているかぎり、この国の文化に未来はないような気がする」と筆者が言う理由について、次のように説明しました。空らんに入る、最もふさわしいことばを、ア・イは本文より指定された字数でぬき出して、ウは本文中のことばを使って答えなさい。

「（ア 五字）」「した作品だけを（イ 二字）な「芸術」として考えているかぎり、（ウ 五十字以内）から。

受験番号

問六 ——線⑤「僕は『芸術家』と呼ばれたいわけじゃない」とありますが、その理由について次のように説明しました。空らんに入る、最もふさわしいことばを、本文より指定された字数でぬき出して答えなさい。

「芸術家」という言葉を聞いて日本人の多くが抱く「(ア 十一字)を演奏する人」というイメージに対して、筆者は「イ 二字」がある上に、そのイメージによって自分が「ウ 二字」と思われることは「エ 三字」であるから。

問七 ——線⑥「もうひとつだと思う」について、次のようにまとめました。空らんに入る、最もふさわしいことばを、本文より指定された字数でそれぞれぬき出して答えなさい。ただし、ウ・エはそれぞれ最初と最後の五字を答えなさい。同じ記号には同じことばが入ります。

クラシックへの理解を妨げている要因は二点あると筆者は考えている。一点目は、音楽史の授業で「ア 六字」をあつかわず「イ 六字」のみを教えていることで、二点目は、音楽史だけを単独で教えていることである。

一点目の問題に対して、「ア」を教え、「ウ 十五～二十字」することが解決策になり、二点目の問題に対して、「エ 二十～二十五字」で学ぶことが解決策になると筆者は述べている。

問八 ——線⑦「音楽家の生き方」について、次のように説明しました。空らんに入る、最もふさわしいことばを、本文より指定された字数でぬき出して答えなさい。

音楽家の生き方は「ア 六字」と深く関わっている。例えば、モーツァルトが音楽を「イ 二字」ではなく「ウ 二字」のために作るようになったという変化は、フランス革命によって「エ 四字」がくずされていったできごとと関連がある。

(二) 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(本文には、省いたり、表記を改めたりした所があります。)

受験番号

出かけるの、と母親がきいた。約束があることを、まだ話していなかったのだ。話せない事情があったわけではないし、話すなど口止めされていたわけでもない。ただ、なんとなく秘密にしておいたほうがいいような気がして、わずかな迷いを抱えているうち、

(A) 言いそびれてしまったのだ。しかし母親に黙って遠出をする習いも少年にはなかった。きかれれば、いや、きかれなくても、だれとどこで遊ぶのかくらいは、いつも素直に伝えていた。

「お昼まえに、お母さんも出るけど」

「お母さんも？」少年が問い返す。

「こちらこそ、そんな話は聞いてなかった、という顔になる。今日はひさしぶりに家でゆっくりできる日はずだった。

「仕事？」

「ううん、買い物もの。このあいだの日曜日、使えなかったでしょ。遠足に着ていく服、はやく買っておかないと、来週は仕事が入ってくるから」

遠足は、再来週の月曜日だ。学校から山沿いの県道を歩いて二時間半ほどの盆地にある通称「空港公園」まで行ってお弁当を食べ、思うぞんぶん遊んで帰ってくる。何メートルかの短い滑走路がひとつきりのaテンケイ的な地方空港のわきに、芝生の運動場を数面備えた市のスポーツ施設があるのだ。(略)

「だれと遊ぶの？」

背後から母親の声がかかる。両腕を腰に当てているときの、きつい声ではない。棘は、そこになかった。ほんとうの名前を明かしたら魂を売ることになり、秘密はもう秘密でなくなる。そんな話をなにかの本で読んだことがあったのに、やっぱり正直に話すことになってしまった。市営住宅の、半間しかないリノリウムの玄関で靴の先をとんとんと床に当てる靴を履きながら、少年はしばしためらい、そして友人の名を口にした。(略)

「B組の、去年、転校してきた子でしょ」と母が言う。

「知ってるの？」

「こないだ、PTAのときお母さんとたまたま席が隣同士になって、ちょっと話したのよ。お父さんが事故で、大変だったんだって」少年は、なにも知らなかった。①秘密だと思っていたことがとっぜんひっくりかえされて価値を失い、今度は母親のほうがちからの知らない情報を握っている。その友人とはクラスがちがうし、学校の外で遊ぶことはなかったから、母親にはほとんど話していなかったのだ。昼の休み時間と放課後につづけているドッジボールの、クラス対抗リーグ戦のまとめ役がその友人で、コートや審判の割り振りなどをいっしょにやっているうち言葉をかわすようになったのだが、転校してきたばかりでそこまで自然にクラスにとけ込み、なんであれ責任のあるところに居場所を見つけた友人の才能に、少年はおどろきと羨望を感じていた。

「お昼はどうするの？ 戻ってくる？ それとも、パンでも買って食べる？ どこかで待ち合わせして、ご飯食べたあと、買い物ものもしようか」

「帰ってこられるかどうか、わかんないんだ」

友人の言葉に嘘がなければ、昼までに家に戻るなんて(B)無理だろう。わからない、と言っておくしかなかった。

「だったら、へんに約束して心配するより、別々に動いたほうがいいかな。鍵、ちゃんと持った？」

「うん」

立ち上がって半身をよじり、ズボンのベルト通しのところにくぐらせた青い紐を、すこし引つ張り出して母親に見せた。その先には財布も結ばれている。リュックを背負うことも考えたけれど、ながい道のりになりそうだったので、よけいな荷物は極力持ちたくなかった。三階の踊り場から棟の北側にある自転車置き場までひと息に駆け下り、赤いダルマのキーホルダーをつけた鍵を愛車に差すと、少年はすぐ、全力でペダルを踏みはじめた。(略)

受験番号

新興住宅地へ下っていく側道とこの道路の交わるところに、約束どおり、友人が黄色いマウンテンバイクを停めて待っていた。

「②遅れてない？」

「大丈夫、だと思っ」

黒くて太いベルトの腕時計を見て、友人は言った。

「行こう」(略)

速すぎも遅すぎもしないリズムで、友人は軽快に走っていく。少年はその動きについていくのが精一杯になっていた。すると急に、友人が振り向いて右手を水平にのばし、人差し指で、そこ、と合図をした。車の来ないのを確かめて車道を横切り、道路工事の際にもうけた資材置き場のような赤土むき出しの、自然のテラスに自転車車を停めた。

「着いたよ。ここさ。ほら、あのうえを通るはずなんだ」

むこうの山を越えて送電線をリレーしてきた鉄塔が、そこからは惑星直列の図みたいになり、一列に並んで見える。鉄塔と鉄塔のあいだの距離はどのくらいあるのか、弛んだ弦を思わせて、なんとなくユーモラスだ。よくこんな場所を見つけたなあ。賛嘆しつつ少年が言う、ぼくの力で見つけたんじゃない、と友人は訂正した。

「写真で、このポイントがわかったんだ」

写真と鉄塔のつながりが、すぐには理解できなかった。しかし、黙ったまま眼下にのびる送電線をぼんやり眺めているうち、友人が仲間のあいだで「イツキョ」に注目されるきっかけになったひとつの出来事を思い出した。

「航空、写真だね」

「うん。父さんが撮った」

去年の秋、創立百周年をむかえた小学校の特別記念行事として、全校生徒が校庭に出て人文字を描いたことがある。全員が体操服に着替え、帽子を赤と白に分けて、あらかじめ石灰で下書きのしてある校章と一〇〇という数字を埋め、それを空から飛行機で撮影してもらうのだ。あと十五分くらいでやってくるはずですから、いましばらく我慢してくださいと校内放送があり、みなわくわくしながら待っていると、西の空の一点からプロペラの音がかすかに伝わってきて③徐々にその環をひろげ、見えない波形を描いた。気がつく、(C) 軽そうな小舟がふわりと宙に浮かんでいた。空に紛れないようずっと濃い青に塗られた機体は、一回、二回と学校の上空を旋回し、仕事をしたのかしないのか下界の人間にはつきり悟らせないまま、来たときとおなじように、④あつけなく飛び去っていった。これで終わり？ たったこれだけ？ 興奮がしずまりかけたころ、友人がまだいくらか昂揚した声で言った。

「いまのは、四人乗りのセスナー七二型スカイホーク。巡航速度は時速一七〇キロくらいかな」

おまえ、飛行機に詳しいんだ。転校生の思わぬ発言にまわりが感心すると、⑤友人はさらなる追い打ちを掛けた。
「乗ってたのは、ぼくの父さんだ。でも、パイロットじゃなくて、カメラマンだけ」

空から写真を撮る。それからしばらくは、(D) 友人の独演会だった。一七二型は写真の撮影や宣伝に使うこと、もうひとまわり大きい六人乗りの二〇六型は主に測量に使うこと、セスナは飛行機の愛称ではなく飛行機会社の創業者の名前で、小型機がみんなセスナではないこと——。友人の舌はなめらかで、父親の仕事を心の底から誇りに思っている様子が、とてもまぶしかった。おまけにその青いセスナは、今度の遠足の行き先である公園の下の滑走路から飛び立ってきたものだったのだ。格納庫にはパイロットの練習機もふくめたセスナ数機と、小型ヘリコプターが一機、つねに整備された状態で置かれていて、災害時には新聞社の要請で飛ぶこともある。友人の父親は報道が「センモン」ではなかったけれど、急な要請にも応じているようだった。

「父さんが撮影したこのあたりの斜角写真を眺めてたら、鉄塔がずらっと一列につながっているのがわかったんだ」

「シャカクって？」

「斜めの角。学校で人文字を撮ったときみたいな、真上からの写真じゃなくて、斜め前を写したやつさ。マンシヨンの広告なんかに使われているのとおなじ」

受験番号

友人は水筒に入れてきたお茶をひと口飲み、飲むか、と少年に差し出した。ひと口、と素直に受け取る。ずっと走ってきて、喉がからからに渴いていたのだ。沿道に自動販売機くらいあるだろうと思っていたのに、この区画には街灯のほか機械の気配もない。

「地図と照らしあわせたら、ここから見えそうだってわかって、下見しておいたんだ」

「この日のために？」

一瞬、間があった。

「父さん、ずっと入院してたんだ、事故で。飛行機じゃないけどさ。退院して、リハビリして、これが初めての仕事なんだ」

事故で大変だったんだって、という今朝の母親の言葉の意味が、ようやくわかってくる。少年は、鉄塔の列の彼方を見据えながら友人の話を聞いていた。去年の冬、スキー場のパンフレットのための写真を頼まれて、友人の父親は、狙いどおりの雪が降った日の午後、それを逃すまいと車を走らせた。滑りやすい道を慎重にたどり、ようやくグレンデの見えるところまで来たS字のカーブで、スキー場での結婚式に参列した一行のワゴン車が、反対車線から飛び出してきたのだという。人数オーバーによる相手の過失と認められたものの、正面衝突で側頭部と背中を強打した父親は、左半身の自由を奪われた。座った状態で右手の指でシャツターを押すことはできても、カメラを手でしっかり支えることができない。厳しいリハビリは半年以上つづいている。そして、まだ終わる様子もない。

木々が揺れはじめた。風が出てきている。少年は帽子をとって手で汗を拭い、dヒタイをその風にさらした。ついでに靴も脱いでむれを逃がした。靴下のまま、ペダルに足を当ると、あの金属の靴べらの、ひんやりした感覚がよみがえってくる。息を吸い、息を吐く。雲は流れていて、視界は良好だ。

「この方角から飛んでくるの？」

「パイロットには、そう頼んでみるって。今日の仕事は、県境の、山崩れの現場を写すことなんだ。ここは通過するだけ。⑥鉄塔のドミノ倒しがおもしろそうだから、ついでに撮るって言った」

「鉄塔のドミノか。ほんとだ。そう見えるね。倒れないといいけれどさ」

少年の言葉に、めずらしく友人は声をあげて笑った。それから⑦腕時計で時間を確認し、もうじきだと思っ、と言っ、また口をつぐんだ。少年も黙った。風はあいかわらず吹いていた。舞っているのかもしれない。堆肥に似たにおいと、なにかを焼いているような焦げくさいにおいが、かすかに混じっていた。きなくさい、という母親の言葉を思い出す。

「遠足で空港公園にいったら、父さんが乗ってる飛行機、見せてあげるよ」

「ほんと？」

「ほんとさ」

「飛行場に入って、怒られないかな」

「なかに入るんじゃないかって、金網越しに見るだけだよ。その時間帯なら、格納庫から出て誘導路の付近にいるはずなんだ」

遠くに、かすかなエンジン音が聞こえたような気がした。あ、とふたりそろって声をあげ、⑧息をつめて、耳を澄ます。車の音がそこに入り込んで、いったん集中力が乱されたが、気を取り直してふたたび空を見あげた。

「⑨……ひとりで来るのが、怖くてさ」

友人がこちらを見ずに、小声でいった。

「うん」

「お医者さんは、もう治らないかもしれないって」

仕事ができなくなっても、父親がいてくれるだけいいよ、とは口に出さなかった。たしかに聞こえる。まちがいはなくプロペラの音だ。

鉄塔のドミノを、鉄塔の弦をまっすぐのばしたその先のほうから音はひろがり、幾重にも重ねた音の環のなかに、光を放つちいさな点が見える。(堀江敏幸『未見坂』より「滑走路」)

受験番号

問一 ――線 a s d のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 (A) (B) (C) (D) に入る、最もふさわしいことばを、それぞれ次から選び、記号で答えなさい。(記号は一度しか使えません。)

ア まさに イ もっと ウ どうてい エ つい オ いかにも

問三 ――線③④⑧のことばの、本文中での意味として最もふさわしいものを、次から選び、記号で答えなさい。

③ 「徐々に」

ア 規則的なリズムで

イ 急速な勢いで

ウ 少しずつゆるやかに

エ 全く途切れずに

④ 「あつけなく」

ア 物足りないくらいの様子で

イ あとも残さないほどの様子で

ウ 予想もつかないような様子で

エ 存在感を少しも失わない様子で

⑧ 「息をつめて」

ア 息もしないようにじっとして

イ あせりにより浅い息になって

ウ 相手とペースや調子を合わせて

エ ごく近くの距離まで近寄って

問四

――線①「秘密だと思っていたことがとぜんひっくりかえされて価値を失い」について、次のように説明しました。空らんア・エに入る、最もふさわしいことばを、本文より指定された字数でぬき出し、イは、本文のことばをぬき出して指定の字数で空らんに入る形に直して答えなさい。また、ウに入る最もふさわしいことばを、後の番号から選んで答えなさい。

少年は (ア 八十字) を今回は秘密にした方がよいと考えていたため、母に質問されても、いつもとはちがって、答えることを (イ 七十字) ほどであった。しかし急に (ウ) ことがわかって、 (エ 三十字) を明かすまいと思っただけの意味が失われてしまったように感じられた。

- 1 友人についてほとんど知らずにいるはずの母が、耳慣れない名を持つこの友人は、転校生だと察した
- 2 友人について大して聞かされていないはずの母が、この友人の母とは意外にも既に親交を深めていた
- 3 友人についてさほど紹介されていないはずの母が、この友人の家族の状況については情報を得ていた
- 4 友人について情報をほぼ持っているはずの母が、この友人が何者であるかがある程度は心得ていた

受験番号

問五 — 線⑤「友人はさらなる追い打ちを掛けた」とありますが、これが具体的にどういうことを述べているかを、次のように説明しました。空らんアに入る、最もふさわしいことばを後の番号から選び、空らんイに入る内容を、指定された字数で自分で考えて答えなさい。

友人は、(ア) ことよって周囲に一目置かれたが、さらに、(イ) 二十〜二十五字 () という事実を示すことよって、周囲から一層注目されるようになったということ。

- 1 皆が知りたいと思っていたことを詳しく説明できる
- 2 セスナについて周囲よりも深い知識を持っている
- 3 場に応じて、上手に発言して級友の関心を引ける
- 4 飛行機への関心が高く、話し始めると止まらない

問六 — 線⑥「鉄塔のドミノ倒し」と表現されている鉄塔の様子を、鉄塔を「ドミノ」とは別のものに喩えて具体的に表現している一文を本文より探し、はじめの五字を答えなさい。

問七 — 線⑦「腕時計で時間を確認し、もうじきだと思う、と言つて」とありますが、このことを踏まえて——線②「遅れてない？」ということばについて、次のように説明しました。空らんに入る内容を、指定された字数で自分で考えて答えなさい。「遅れてない？」という問いかけは、約束の時刻に遅れていないかということだけでなく、(二十五字以内) タイミングに遅れていないかということを問いかけている。

問八 — 線⑧「……ひとりで来るのが、怖くてさ」とありますが、友人がそのように思った理由について、次のように説明しました。空らんア・イに入る、最もふさわしいことばを本文中より指定された字数でぬき出し、ウは指定された字数で自分で考えて答えなさい。

友人は、(ア) 十八〜二十字 () ことが周囲から見ても明らかである。だからこそ、父のリハビリが(イ) 七〜九字 () ことや医者が話した言葉を踏まえて、(ウ) 十〜十二字 () 可能性について、ひとり考えてしまうことを恐ろしく感じているために、ひとりで来るのが怖いと思った。

問九 本文から読み取れる少年と友人との関係はどのようなものですか。次から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア 気が合う仲間同士であり、二人とも、相手に対しては、自分自身の内心の思いを何でも素直に伝えあっている。
イ 互いを信頼し合っており、少年は友人の才能を認めて一目置き、友人は少年に苦しい胸の内を明かしている。
ウ 家族ぐるみの付き合いであり、友人は少年に、父にとって特別な仕事があることを明かした上で、誘いだしている。
エ 去年からの短い付き合いだが、共に遠出する機会を重ねており、友人は、遠足の日も少年と行動したいと望んでいる。

問十 本文の特徴について、次のように説明しました。内容が明らかに誤っているものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 目的地で飛行機を待っている場面では、少年が風景の変化に視覚を働かせ、肌への触感を味わい、周囲のにおいや物音も敏感に感じ取っている様子を描写することによって、少年の感性が研ぎ澄まされている様子を表現している。
イ 小学校の校庭の上を飛行機が旋回する場面では、具体的な数字を用いたり、地上や上空の様子を、色彩の対比を用いて描写したりすることによって、少年のこの時の出来事についての記憶が鮮やかなものであることを表現している。
ウ 少年とその母が会話する場面では、会話文そのものだけでなく、少年の声色や表情の変化に関する描写を加えることによって、少年の気持ちの変化がゆく様子を、読者が想像しやすくなるように工夫して表現している。

エ 小学校で友人が飛行機や写真について語る場面では、友人が興奮気味の声で、小学生にはやや難しい言葉を用いつつ、少年や他の子どもたちにすらすらと話し続ける様子を描写することで、友人の並々でない熱意を表現している。

